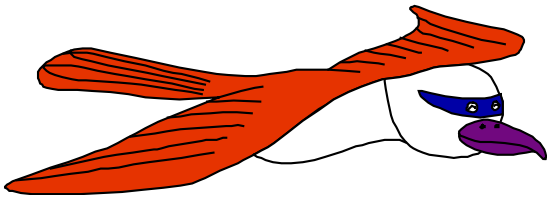
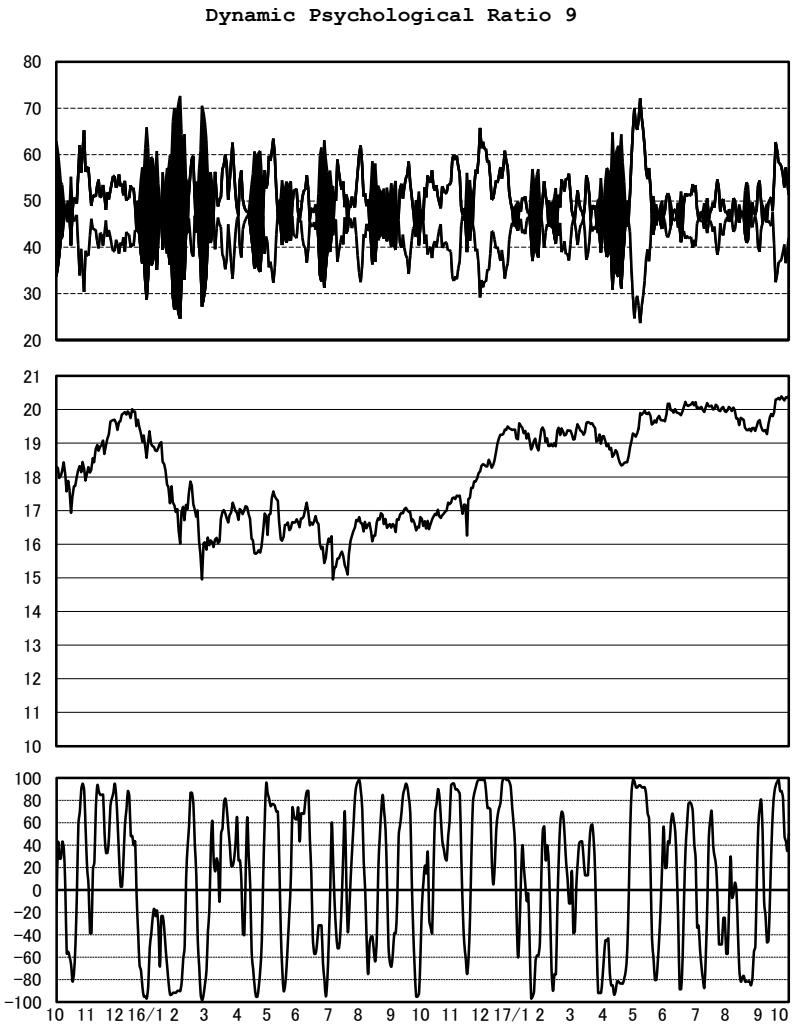
発行日：　平成２９年１０月　３日
発行者：今村証券株式会社
金融商品取引業者 北陸財務局長（金商）第３号
日本証券業協会加入
制作責任者：営業業務部 調査課

情報シャトル特急便

第６０６号





上図は騰落銘柄数をベースとした独自のもので、黒の幅が拡大→買い場、白の幅が拡大→売り場
下図はRCI（9日ベース）で、　-80%ラインを上につき抜け→買い場
80%ラインを下につき抜け→売り場

大 所 高 所

トルコ唯一のノーベル文学賞作家オルハン・パムクの小説①「私の名前は赤」②「雪」③「僕の違和感」を立て続けに読んだ。イスラム原理主義など複雑な宗教的対立によって中東は大きく揺れ、テロや難民問題などで西側諸国に激しい衝撃を与え続けている。しかし、中東から遠く離れている上、宗教的対立のほとんど無い我が国に居ると、その中味が実感として捕らえにくい。それを分かりやすく書くのがパムクだ、というので世界的に爆発的人気が出ているという。

①は中世、②は 80 年ほど前、③は現代が舞台なので、当然のことながら③→①と難解さは増す。特に①はイスラム細密画に関する話で、美術的内容の理解に時間が掛かる。その点、③は飲料の流し売り屋が主人公なのでとっつきやすい。だがそれにも拘らず、本当に読みにくい。訳し方が下手だからという書評が多いが、そうではないように思える。パムクは中国のノーベル賞作家「莫言」がそうであるように、慎重に政治的制裁やテロの対象になることから逃げている。莫言は喜劇的異様状況で逃れているが、パムクは感情の揺れや恋を詳細に描くことで逃げている。だから，莫言以上に話の筋道が揺れ、カフカ的な不条理が前面に出て読みにくいのだ。そのように苦心せざるを得ない程に、中東の混迷は中国以上に複雑で根が深い、と思い知らされた。

（ＢＩＳ）

ただ一筋

下期入りとなった昨日の日経平均株価は、終値で 2 万 400 円 78 銭と年初来高値を更新した。背景には欧州、米国を中心とした先進国の景況感が好調であることに加え、寄り前に発表された日銀短観の結果もあったようだ。

一方、日足チャートでは 9 月中旬以降の上放れ足以降は陰線続きとなり、上値の重さを意識せざるを得ないが、再浮上へのマグマは着実に蓄積されているとみたい。需給面では、長らく売り越し基調だった外国人投資家（現物株・先物合計）が 9 月第 2 週から大幅買い越しに転換している。彼らは世界景気の先行指標として流動性のある日本株を活用する傾向があり、これまでに積み上げてきた売りポジションを買い戻しに動いてきたようだ。

半面、北朝鮮問題は依然として存在するも、国連決議で中国、ロシアの協調姿勢もあって沈静化の方向であること、衆院選については不透明はあるものの、民進党の分裂もあって、最も懸念される「与党の大敗」は無いと想定したい。

ならば、当面の物色としては中小型個別株でいいのでは。今月後半からの第 2 四半期決算発表で上方修正期待の銘柄の押し目は積極的に買いたい処だし、直近ではノーベル賞、シーテックジャパン、バイオジャパンなど注目のイベント開催で株価刺激材料の出現も期待されよう。個別銘柄では、前号に続き中村超硬（6166）を挙げたい、本業（ダイヤモンドワイヤ製造）に加え、創薬研究の効率化で期待のマイクロリアクター関連事業も期待される。

（三感王）

当 た り 屋 見 参

先週の東京株式市場は週初めこそ反発したものの、地政学リスクの再燃などが重荷となり、中盤は一進一退の動きとなった。ただ、米国の大型減税案や、追加利上げ観測の強まりを受けて円安・ドル高の動きが進み、買い先行になる場面もみられるなど、上値は重たいが下値は底堅い相場展開だった。

今月 22 日には衆議院選挙が行われ、今後は与野党の選挙戦を意識した展開となりそうだ。選挙の結果を見極めたい投資家も多いとは思うが、米国の経済指標や日本の経済指標を見る限り、結果はどうであれ、今後の日本株の上昇基調は続くとみている。

個別銘柄としては東証マザーズのグレイステクノロジー（6541）に注目している。同社はマニュアル管理システムや、製品マニュアル作成事業を手掛ける。ファナックやトヨタ自動車などを顧客に持つことから、今後のテーマとなるロボット・自動運転・EV の実用化に向け、コスト削減の面で大きく貢献していくと考えられ、さらに値上がりが期待できるのではないかと考えている。

（腹）

中 堅 の 視 座

このところは、米朝対立で地政学的リスクが高まり、米国株をはじめ日本株も上値を抑えられる展開だったが、大きく円高に振れず、日本株もそんなに振れることはなかった。もう地政学的リスクはそんなに過度に考える必要は無いだろう。逆に、少しでも安くなった局面では、仕込み場と考えた方が良い気がする。

そんな中で物色対象としては、今まで取り残され続けてきた「銀行株」と見る。米国長期金利は、イエレンＦＲＢ議長の年内にもう１回の利上げをほのめかす発言で、上昇傾向にある。欧州も金融引き締め方向に動き、世界的に金利が上がりやすい状況になっている。世界的に金利が上昇しやすい局面であれば、金利上昇で恩恵を受ける銀行株の上昇は時間の問題だろう。また、日本の 20 年債利回りをみても、昨年７月はほぼ 0%だったが足元は 0.6%程度である。こうしたなかでの銀行株高はまだ小幅に見える。

銀行株の中でもやはり三菱ＵＦＪフィナンシャル・グループ（8306）が売買高の面から見て良いだろう。今のうちにしっかり仕込んでおきたい。

（香る山）

きらきら星

「いきなり！ステーキ」という外食チェーンがあります。一度は行ってみたいと思っていながらまだの方も多いのではないでしょうか？石川県では、イオン新小松に続き11月に「いきなり！ステーキ金沢御経塚店」がオープンするとの事なので、人気の高さが分かります。

このお店を展開しているのはペッパーフードサービス(3053)です。株価はすでに大きく上昇してしまったため、今回は「人気株の後追い」を避けて、ペッパーフードサービスの第2位の株主であるS FOODS(2292)に注目してみたいと思います。「こてっちゃん」で有名な会社で売上は直近5年間で約2倍となり配当も4年連続増配しています。「身近な企業に注目しなさい」っていうピーター・リンチの有名な言葉もありますから一度調べてみられたらいかがでしょうか？

最後に余談ですが、ダイソンがEV開発に乗り出すと先週発表がありました。どんな車を走らせるのかと想像したのですが、主婦としては、車型のダイソンの超強力な吸引力のお掃除ロボットが、リビングを走行している姿の方がほほえましく感じます(笑)。

（百日草）

デ ジ タ ル の 俯 瞰

来年から始まるZEV規制強化を直前に控え、電気自動車関連銘柄には、駆け込み的に、断続的に、材料が出てきている。トヨタ・マツダ・デンソーの新会社設立のニュースも大きかったが、人間は「直前」が一番動く。年末にかけて、こうした大きな動きはまだ出てくるだろう。

電池関連銘柄も健在だ。四季報の秋号をくまなく読んだ方ならお分かりの通り、電池銘柄を単なる材料株だと思っていてはいけない。電池関連銘柄の多くには、ようやくしっかりと業績もついてきている。

また、EV相場の走りのころは電池関連一色だったが、モーターコアの重要性にも、ようやく相場が気付き始めた。電磁鋼板を円形に抜き、プレス加工し、それを幾重にも積層し、モーターのまさしくコアに配置される。この工程において、特殊な接着剤を使って電磁鋼板を積み上げる「接着積層工法」を持つのが以前に取り上げた黒田精工(7726)だが、ここではさらに足を先に進めて、アイダエンジニアリング(6118)に注目をしよう。

先述の通り、モーターコアの製造には、電磁鋼板をプレス加工する必要があるが、アイダエンジニアリングはそのプレス機に強い引き合いがある。モーターコアを注目するなら、アイダにも注目しないわけにはいかない。同社のホームページにも「高いシェアを持ち」、「モーターコアの製造には欠かせない」とある高速自動プレスに、今から目を付けておきたい。

（パプリカ）

アナリストによる北陸企業便り

（織田真由美）

＜ＣＫサンエツ＞

黄銅棒、黄銅線が主体で、黄銅棒では 5 割近くのシェア。建設関係、家電や自動車向けが主たる取引先だ。事業領域を拡大すべく精密部品に注力し、カメラマウント部品では世界シェア 90% を誇る。今後も精密部品やめっき線の事業を増強し、Ｍ＆Ａも視野に入れる。

業績は銅市況に影響されやすいものの、経常利益ベースでは安定性を増してきている。市場が縮小する中で他社との事業提携やＭ＆Ａなどによってシェアを拡大していること、鉛レスなどの環境規制に対応していること、銅の市況変動に対応すべくデリバティブ取引などでヘッジをかけていること――が奏功している。こうした中で、前期 2017 年 3 月期の経常利益は 6 期ぶりに過去最高益を更新した。

今期業績は増収減益予想。銅価格の上昇、需要拡大によって増収を見込む一方で、前期に発生した原料相場差益の減少が見込まれる。ただ、銅の価格が期初見通しよりも強含んでいるうえ黄銅棒の需要も堅調なことから、業績予想には上方修正が期待される。

一方、銅市況が乱高下すると、原料相場差損やデリバティブに係る評価損益等が発生する可能性がある。銅価格には注意が必要だ。

罫 線 中 僧

6101　ツガミ

週足

日足

出所：ブルームバーグ

現在の日経平均 2 万円台での推移は、好調な企業業績拡大あればこその値動きである。景気循環のもとでの企業業績拡大こそが、株価の最大の上昇要因であり、政治・選挙・北朝鮮問題は一時的な変動要因なので、過剰反応は禁物である。

IoT や電気自動車などのテーマは食傷気味ではあるが、やはり今後も景気を牽引する産業であることは間違いないと思われる。今回は設備投資関連から、ツガミを取り上げたい。直近 6 カ月は 75 日移動平均線を支持ラインに 930 円台までの往来相場を繰り返していたが、9 月 6 日に 837 円示現後、中国子会社の香港証券取引所上場を材料に、長大陽線、差し込み線を交え 9 月 21 日は 1,057 円まで大幅上昇、その後は 25 日移動平均線までの下落に至っている。貸借倍率は 0.39 倍と売り長の状態が続いていて、継続的に自社株買いも行っている。注目したい。

（しんのすけ）

＊情報シャトル特急便は、投資家の参考となる情報提供を目的としておりますが、投資にあたってはご自身の判断でなされるようお願いします。

株式の売買取引には、約定代金に対して最大1.1799%（税込）（1.1799%に相当する金額が2,565円未満の場合は2,565円（税込））の委託手数料をご負担いただきます。株式は、株価の変動により損失が生じるおそれがあります。

非上場債券を当社が相手方となりお買い付けいただく場合は、購入対価のみお支払いいただきます。債券は、金利水準の変動などにより価格が上下し、損失を生じるおそれがあります。

投資信託にご投資いただくお客さまには、銘柄ごとに設定された販売手数料および信託報酬等の諸経費等をご負担いただきます。投資信託は、主に国内外の株式や公社債等の値動きのある証券を投資対象とし投資元本が保証されていないため、当該資産の市場における取引価格の変動や為替の変動等により投資１単位当りの価値が変動します。したがって、お客さまのご投資された金額を下回ることもあります。

外国株式・外国債券等は、為替相場の変動などにより損失が生じるおそれがあります。

商品ごとに手数料等及びリスクは異なりますので、その商品等の上場有価証券等書面、契約締結前交付書面やお客様向け資料をよくお読みください。